



institution	広島経済大学 (Hiroshima University of Economics)
Title	『二都物語』の“ The Honest Tradesman” ( ,xiv)におけるパロディカルな反復について
Author(s)	田辺, 洋子
Citation	広島経済大学研究論集, 16(1): 39-49
URL	<a href="http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/2448">http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/2448</a>
Rights	

## 『二都物語』の“The Honest Tradesman” (II, XIV)

## におけるパロディカルな反復について

田 辺 洋 子

フランス革命を描くためでさえ、或いはそれだからこそロンドンを必要としたとは、いかにもディケンズらしいが、ロンドンとパリの二都市を舞台にした小説を書こうとした時、作者はどのような手段によって、視点の自然な移動を可能にしたのだろうか。まず、この小説を歴史小説とみなすことには異論もあるのだが、時間を超越した歴史的視点は自ずから空間的にも宇宙を包む広大な視点になったとは言える。人間の悲喜劇が繰り広げられる地球も宇宙の一点でしかなければ、二都市の距離は無に等しい。続いて、この小説に与えられた週刊誌連載の形式も目まぐるしい場面の展開に好都合であった。それは当時の月刊分冊に慣れた読者に、フランス革命の激動を肌で感じさせる新鮮なスピード感を与え、場面の急転を容易にしただろう<sup>(1)</sup>。さらに作者は、銀行勤めの同時代人的な Lorry 氏を narrator に近い位置に設定し、narrator と登場人物、又、彼らと読者の橋渡しを円滑に行わせている。銀行からの委託以上に、物語から視点の上で大きな任務を託されているこの身近かな銀行員は、読者をドーバー海峡横断の道連れにする。通算すると四十五章からなるこの物語の中で彼一人が過半数の章に登場し、彼を一種のヒーローとみなす考えが成立するのをもっともである<sup>(2)</sup>。

三巻からなるこの作品は、Lorry 氏が、バスチーユ監獄から救出されて間もないかつての顧客 Dr. Manette を迎えに行くドーバー街道に始まり

その任務を果たした後の帰路で結ばれる第一巻(六章)、亡命貴族 Darnay の帰国を発端にして、Lorry 氏が彼や Lucie 一行を再びイギリスへ連れ帰って幕を閉じる第三巻(十五章)が、中心の第二巻(二十四章)を両脇からバランス良く支える構成になっている。このような、第一巻、第三巻に見られる実際の旅を利用した視点の移動は、Lorry 氏や Darnay の設定から考えて、それほど困難なものではなかっただろう。一方、「旅のない」第二巻において、ロンドンでの Manette 父娘の平和な家庭生活を描きながら、革命前後のパリの不穏な雰囲気を持続させることは様々な技巧を必要とした。両都市で繰り返し照らし合わされる親殺しのテーマ、ソーホーの住居に取りついた木霊が響かせるフランス民衆の足音のモチーフなどはこの困難を克服する最も有効な手段と言えるだろう。さて本論では二都市を結ぶもう一つ的手段として、Tellson 銀行の遣い走り Jerry Cruncher 親子によるパロディの効果を取り上げたい。彼らが、単に、ユーモアに欠けるこの暗い作品における唯一の、しかも不十分な例外ではなく、親殺しのテーマにも深く関わっていることは A. Hutter の指摘通りである。<sup>(3)</sup>しかし、彼らはそれ以外にも重要な役を演じているのではないだろうか。二都市を実際に結ぶものが道なら、フリート街の道端に椅子を置いて、終日、人馬の流れを観察している親子が、その「道」との関連から他の路上のドラマを反復したとしても不思議ではない。Jerry と相対的な位置にあるフランスの貧民が道路人夫であること自体、そのことの裏付けになるのではないだろうか。では、Cruncher 親子がフリート街に居ながらにしてロンドンとパリを結びつけ、作品構成に貢献しているとはどのような場面においてであろうか。以下、その代表的なものとして第二巻十四章に起こる葬送馬車乗っ取り事件を取り上げ、この章について具体的な検討を加えたい。

まず、第二巻十四章は構成上、どのような位置にあるだろうか。この章は第二巻のクライマックスである Darnay, Stryver, Carton の三者三様の Lucie への求愛というロンドンの愛の物語の直後に置かれている。又、全

体的に見ると、山場に当るフランスでの Gaspard 処刑の直前に当る。前後関係としては、フランスでのエブレモンド侯爵殺害（二巻，八，九章）——ロンドンでの求愛（同，十～十三章）と Gaspard 処刑（二巻，十五，六章）——Lucie の結婚（同，十七章）の間に挟まれ、交錯する、フランスにおける革命発端の残虐行為とイギリスでの恋愛物語の中間で、一見異質な存在となっている。<sup>15)</sup>次に Cruncher の側から言えば、比較的コンスタントに登場する冒頭及び結末部分を除くと、これは第二巻七章から第三巻六章までの二十三章のうちで唯一度与えられた登場の機会なのである。さらに、主演を演じる唯一の場と言っても良い。このように重大な局面で印象的に置かれた Cruncher 親子のエピソードは何を物語っているのだろうか。

第十四章は大きく昼間の「乗っ取り」と深夜の墓暴きに二分される。まず英仏をつなぐ親殺しのテーマの確認の意味から、後者を先に取り上げることにしよう。ここでは Jerry の息子 Young Jerry の意識に焦点が当てられている。ある晩、Jerry は妻子が眠りについたので見届けて、その日、自ら埋葬を見届けた棺を掘り出すために仲間二人と誘い合って「釣り」(‘fishing’ (p. 151)) に出かける。<sup>16)</sup>しかし、日頃から彼の行動を不審に思っている息子は、こっそりベッドを抜け出して後を追う。深夜の父親の行動を盗み見るといふ点で彼は一種の親殺しの罪を犯していると言える。彼の想像力が未知なるものへの好奇心、恐怖に取りつかれ始めると、墓石は「白衣の幽霊」(‘ghosts in white’ (p. 154))、尖塔は「怪物じみた巨人の幽霊」(‘the ghost of a monstrous giant’) に姿を変える。さて、親殺し未遂のこの子供の想像力が捕えた墓石、尖塔のイメージは、求愛の章を挟んで遡る、侯爵殺しを目論み彼の馬車の車輪にしがみついた Gaspard の姿を彷彿させる。その時彼は「土埃にまみれて、幽霊のように白く、幽霊のように高かった」(‘All covered with dust, white as a spectre, tall as a spectre’ (p. 109)) と伝えられていたからだ。領主殺しも親殺しの一種とみなせば、この同罪を犯しつつある両者に共通したイメージの仮定を、犯行後の両者

にも共通するイメージによって確証したい。Young Jerry は恐怖の余り、一端は逃げ出すが、棺を釣り上げる父親の「竿」の魅力が彼を「釣り戻す」。しかし、終に、棺が「水面」に現われた時、彼は一目散に駆け始める。ところが不幸にも直前に垣間見た棺が直立して彼を追い駆け「幽霊じみた競走」(‘a spectral sort of race’)の始まりとなる。親殺しの犯人を追って来るのは「尾と腕のない水腫症の凧」(‘a dropsical boy’s-Kite without tail and wings’)のようで「笑っているように」(‘as if it were laughing’)肩を竦めている。これは犯行一年後に、侯爵殺しの廉で牢へ引き立てられる Gaspard の姿を予示していないだろうか。「幽霊のように高かった」この男の両腕は、この時「縛られて」(‘with his arms bound’ (p. 160)) いるために「腫れて」(‘swelled’ (p. 161)) いる。彼と彼を追い立てる兵士の一行は「狂人の徒競走のような」(‘like madmen running a race’) 勢いで坂を下り、その影は「巨人の影のように」(‘like the shadows of giants’) 山肌に伸びていた。その後、小高い丘の上の牢に入れられた彼の顔は、きつい猿轡のせいで「ほとんど笑っているように」(‘almost as if he laughed’ (p. 163)) 見えたと言われる。もちろん彼は「親殺し」(‘a parricide’ (p. 162)) の罪で処刑される運命にある。Young Jerry の親殺しの罪の意識は、異国で同様の罪を犯した人間そっくりな棺の幻となって予兆的に現われていた。作家の側から言えば、彼は六章前の犯行直前の Gaspard の姿を Young Jerry の恐怖心に墓石のイメージとして引き受けさせ、さらに、次章の死刑確定後の Gaspard の姿を、言わば「犯行後」の Young Jerry を追う棺のイメージとして予示させているのである。

ここで見方を変えて、Young Jerry を Gaspard 自身でなく、彼の様子を身振りを交えて物語る道路人夫の方に近付けることも可能である。彼もまた領主に対する「子供」であり、「大してお目にかかったものもなかった」(‘he had not seen much in his life’ (p. 160)) という「寂しい道」で費やされた人生であれば、路上で Gaspard を目撃したことは、innocence において、Young Jerry の「初体験」(‘being new to the sight’ (p. 154))

に通じるところがあるからだ。それ故、彼を含めた村人が牢につながれた Gaspard を「盗み見る」行為が Young Jerry の視線に似て来るのである。Jerry の息子の罪の意識は Gaspard を連想させるアニミズムとなって表出したが、その場における反応は Gaspard に対する道路人夫に適應される。もとより Gaspard の姿は全て、彼を見た道路人夫の想像力が描いたものであることは彼が多用する ‘like’, ‘as if’ に顕著に現れている。道路人夫の目に、連行される Gaspard が既に「死人のように」(‘like a dead man’ (p. 161)) 映っていたように、Young Jerry もその中に ‘a dead man’ を想定したからこそ、棺が走り出したに違いない。道路人夫が憑かれたように Gaspard を演じ終え、Young Jerry がベッドまで棺に追い詰められた後、共に「深い眠りに落ちる」ことは、潜在的親殺しの悪夢からの開放を象徴的に物語っている。さらに付言するなら、棺——Gaspard のイメージは、La Force 牢獄の中で、もう一人の潜在的親殺し Darnay をも苦しめることになる。彼は看守の「腫れた顔」(‘a bloated face’ (p. 241)) を見て、「溺死体のようだ」(‘look like a man who had been drowned’ (p. 244)) と感じるのだが、あの水腫症の胤のような棺はもちろん、水中から「釣り」上げられたものであったし、転げ落ちるように坂を下りて行った Gaspard は道路人夫の目に「川に飛び込む」(‘plunges into the river’ (p. 110)) ように映ったのではなかったか。この親殺しに共通するイメージによって、作者は英仏の上、下層階級を縦横に結び合わせ、絶えず互いに喚起し合わせているのだ。

以上、Young Jerry を追う棺のイメージを取り上げたのは、親殺しのテーマ自体を論ずるためではなく、作者が侯爵殺害を求愛の章のギャップを乗り越えて Gaspard 処刑へつなぐ上で、このテーマをいかに暗黙のうちに反復的に利用しているかを指摘するためであった。同様の方策はこれに先立つ父親 Jerry の昼間の奇行のエピソードにも見出すことが可能だ。いや、それどころか、このエピソードは特定のイメージではなく、行為そのものがより内密に大きなテーマと関わっている点で一層グロテスクであ

る。それが時間的な順序に反して論じることになった理由でもあった。では、ここで、Jerry が運んでいる例の棺の中身は実は「舗装用の石」(‘paving-stone’)であり、侯爵の死も「石化」(‘petrification’)のメタファで描かれていたことを念頭に置きつつ、この葬送の壮観をながめることにしよう。ここでは‘driving’という行為が章の展開の軸として捕えられている。

いつものように椅子に腰を下ろし、通りをながめている Jerry の前を、この日、葬式馬車の列が通りかかった。それは、従来の、片や太陽と共に西に向かい、片や反対に東に向かうが、共に人知の及ばぬ地へ赴く「二つの巨大な行列」(‘two immense processions’ (p. 147))に組み込まれたもう一つの「行列」(‘procession’ (p. 150))であるばかりか、死に向かう人生の流れの中で、文字通り人間の行き着く先を示す紛れもない縮図となっている。ところが厳粛であるはずのこの一行に、人々の罵声が飛び交っている。聞けば棺の中には Cly という悪名高いスパイが眠っているらしい。たった一人の参列者まで逃げ出してしまうと、人々は霊柩車と葬式馬車を乗り取り、一転して見世物行列の賑わいとなる。もちろん Jerry もその一員に加わるが、彼は Tellson 銀行に見つからないように馬車の屋上の一番奥に身を潜めることを忘れていない。行く先々で人や物資を徴発するこの一行が目的地に着くのは容易な事ではないが、人生の真理を突くかのように、「やがて確実に」墓地に到着、埋葬の運びとなる。さて、この煙突掃除夫とパイ売り商人に御車席を奪われ、できる限りの市民を乗せた二台の馬車ほど「墓場までゆっくり駆ける」馬車があるだろうか。即ち、結論から先に言うと、これは Gaspard が侯爵殺害時に残した‘Drive him fast to his tomb’ (p. 122) という呪いを完全に逆の形で蘇らせたものではないか、ということである。このパロディはあの事件との時間、空間、気分の隔たりを一気に克服しているのではないだろうか。侯爵殺害の章と一年後の甥、Darnay の愛の告白の章とは彼を中心に自然に展開していた。しかし、その後、Stryver, Carton の告白の数章を経て Gaspard 処刑に移る時、作者にはこのロンドンの路上での言わば‘drive [Cly] slowly to his tomb’

が必要だった。このエピソードの重要性は、これが結末部分で Carton が Jerry を通して、この時の参列者 Barsad を籠絡する切り札となる点にだけあるのではないだろう。作者は読者の無意識の世界にあの呪いの焼き直しを逆の形で繰り広げて見せているのだ。棺の中には「石化」した侯爵と同じ「石」まで用意した上で。

ここで改めて ‘Drive him fast to his tomb’ という呪いの意味を再検討する必要があるだろう。‘drive’ という語には微妙なニュアンスがあり、「馬車を駆る、馬車で送る」以外に、広義に「追う、駆り立てる」という意味があり、例えば「早々に墓場へ送れ」という中野好夫の訳は「<sup>(7)</sup>早々」から判断しても、恐らく後者の立場を取っている。しかし、それでは Jerry の ‘driving’ のパロディの味が弱められてしまうことになる。そこで Gaspard の用いた ‘drive’ を Jerry と同じ「馬車で送る」と解釈する二つの理由付けを試みたい。まず指摘したいのは、これを書き残した Gaspard の恨みは疾走する侯爵の馬車に子供を轢き殺されたことにあったということである。市井の人々が貴族の ‘hard driving’ (p. 103) の犠牲になることは日常茶飯事であったらしいが、その日も侯爵は彼らを蹴散らすように馬車を走らせていた。その馬車に子供の命を奪われた Gaspard の呪いは馬車に向けられて然るべきだ。あのメモは「それほど速く走らせたいなら、墓場にまでも速く送り届けろ」と言っていたのではないだろうか。彼が侯爵の馬車の車輪に身を潜め（この点でも屋上席に身を隠した Jerry は抜かりなくパロディを演じているが）殺害現場近くまで行った時、彼は文字通り馬車に「取りついて」いるのだ。侯爵の馬車は子供の死体を残して出発した時から、Gaspard と彼の恨みを乗せて走り出した。それが既に「墓場への疾走」であったことは、車上で彼が全身に浴びた真紅の夕陽によって示されているだろう。

第二の点は侯爵にはもう一人「馬車の疾走」に関して恨みを抱いている人間がいたということである。言い方を換えれば、彼の「墓場への疾走」は Gaspard の子供を轢く以前に既に始まっていたということである。恨



んでいる人間とは Dr. Manette のことであり、「発掘」された彼の手記がそのことを明らかにする。そこにはこの医師が、二十数年前、他でもないエブレモンド侯爵兄弟によってバスチーユへ送り込まれた経緯が記されていた。彼は1757年の暮れも押し迫ったある夜、「疾走する」(‘driven very fast’ (p. 303)) 馬車で連れ去られ、貴族の館で二人の瀕死の農民を看取るよう命ぜられる。一人は Manette 同様、「馬車で拉致され」、暴行された拳句、半狂乱で死んでゆく百姓娘。もう一人は姉のために侯爵に挑みかかり、逆に「胸に致命的な剣の一撃」を受けたその弟である。彼らの死を見届けた Manette は一端は帰宅を許されるが、密告を恐れる兄弟に再び拉致され、バスチーユへ送られる。その時の様子を彼は次のように記していた。「馬車は私をここへ、墓場へ連れて来た。——私はここへ、生きながらの墓場へ連れて来られた。」(‘It [A Coach] brought me here, it brought me to my grave. ……I was brought here, I was brought to my living grave.’ (p. 315)) 確かに彼は馬車で墓場へ送られた人間である。そしてそのドラマの発端には「疾走する一台の馬車」があった。このように考えると Gaspard によって侯爵の「胸に突き立てられた」(‘Driven home into the heart’ (p. 122)) ナイフとあの言葉には、Gaspard だけでなく、「馬車」と「剣」によって死んで行った姉弟、そして Manette の恨みまでもが込められていたとも言えるのである。付言するなら、Manette の事件は「石化」によっても、墓地へ運ばれた他の二様の石と結ばれている。墓場へ送られた経験を持つこの第三の人物も、やがて Darney 再逮捕を目の当りにして「石像のように硬直」(‘turned into stone as if he were a stature’ (p. 277)) する運命にあるからだ。<sup>8)</sup>

以上で Gaspard の呪いの言葉は、イギリスの路上におけるその完璧なパロディを通して、自然に次章の彼の処刑へと引き継がれることが明らかになったが、作者はさらに入念にこの章にも、もう一つの ‘drive him to the tomb’ を用意していた。‘drive [Cly] slowly to his tomb’ を「実行」したのが Jerry ならば、続いて道路人夫は、彼が「寂しい道」で見かけ

た、兵士に引き立てられる Gaspard の様子を、彼に「扮して」次のように物語っている。

“‘Come on!’ says the chief of that company, pointing to the village, ‘bring him fast to his tomb!’ and they bring him faster. ……Because he is lame, and consequently slow, they drive him with their guns—like this!” (p. 161)

「早く墓場へ連れて来い」(‘bring him fast to his tomb’)とは恐らく Gaspard の呪いの言葉を彼自身に当て付けたものだろう。ここでは ‘drive’ が ‘bring’ に置き換えられ、それは後に Manette によって用いられる言葉となることは先に触れた通りである。‘his tomb’ も直接的には、これから入れられる牢を指している点でも Manette の場合に等しい。ところが Manette の言葉と違う点は彼の ‘bring’ が「馬車で送る」の ‘drive’ に置き換えられた一方、この場合はそれが不可能であることだ。貴族の象徴でもある馬車は Gaspard とは無縁であり、当然、彼は徒歩で牢獄へ向かわなければならない。しかし、徒歩で足を傷めているが故に ‘slow’ なこの「墓場への行進」の最も皮肉な点は、「遅い」がために彼が「追わ」(‘drive’)れ、道路人夫の目には ‘bring him fast to his tomb’ が、仮に言葉にすれば ‘drive him slowly to his tomb’ として現出していることである。Gaspard は一端 Jerry によってパロディ化された形で彼の呪いの「言葉」の償いをしなければならなかった。その「文字」通りの償い方を我々は道路人夫を通してまざまざと見せつけられている。

以上で Cruncher 親子は墓地への ‘driving’, Gaspard のイメージ、石化のメタファを重層的に再現しながら、この小説が爆発寸前に最も熱を帯びた所——バスチーユ襲撃前のフランス人民の怨念とロンドンの若者達の熱愛が今にも燃え上がろうとする時にロンドンに居ながらにしてフランスの見事なパロディを演じることで、単なる ‘comic relief’ 以上の効果を上げ

て物語の中央を堅牢に支えていることを明らかにしたつもりである。最後に、Jerry の「葬送」の重要性は作品中央部における、読者の意識の下に働きかけた場面転換への貢献に留まらないことを付け加えておきたい、このエピソードが結末近くに出て来る Manette の手記とも深く結びついていたことは既に述べた通りであるし、「偽装葬儀」(‘mock-funeral’ (p. 212)) という点ではフランスにおける old Foulon の葬儀とも一致するように、このエピソードとの関連性は随所に見出される。断頭台に荷車で運ばれる Carton できえも街頭の見世物となりながら、ゆっくり墓地へと向っていると言えるのだ。Lorry 氏による救出の ‘driving’ に始まり、終わったこの物語は、クロノジカルに見れば Dr. Manette の墓場への ‘driving’ に始まり Carton の同様の ‘driving’ で終わったと考えることもできる。ただ、Carton は例外的に、墓場への道を自ら選び取ることによって「石化」を免れている。刑場へ運ばれる時、彼は既に、精神的にはセーヌ川に呑まれる一つの渦に同化していた。彼の墓場への ‘driving’ があって始めて Lorry 氏の救出の ‘driving’ が成立することが、彼の精神を昇華させずにはおかない。人を欺く死体という点に関して、Darnay になりすました Carton の死体ほど、この欺瞞を欺瞞のためとしてではなく、公然と行っているものはない。Jerry の加わった珍妙な ‘mock-funeral’ の一方で、命の代わりに石ではなくもう一つの命を置いた、Carton の荷車による葬送こそ、最も美しい ‘mock-funeral’ だったのではないだろうか。

## (注)

使用したテキストは The Oxford Illustrated Dickens 版 Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (London: Oxford Univ. Press, 1987), 以下 *TTC* と略す。本文引用は括弧に入れて頁数で示す。

- (1) Linda K. Hughes and Michael Lund, *The Victorian Serial* (Univ. Press of Virginia, 1991), pp. 59-74.
- (2) John Kucich, *Excess & Restraint in the Novels of Charles Dickens* (The Univ.

of Georgia Press, 1981), p. 115.

- (3) A. D. Hutter, “Nation and Generation in *TTC*,” *PMLA*, 93 (1978), pp. 448-62. 同じく Hutter の “The Novelist as Resurrectionist: Dickens and the Dilemma of Death,” *DSA*, vol. 12 (1983), pp. 1-39.
- (4) “a mender of roads” という名前に注目しているのは Mildred Newcomb, *The Imagined World of Charles Dickens* (Ohio State Univ. Press, 1989), p. 196.
- (5) この章を “the London riot is but a comic rehearsal of the Revolution” とし  
てあまり重要性を認めていないのは Sylvère Monod, “Some Stylistic Devices  
in *TTC*,” in *Dickens the Craftsman: Strategies of Presentation*, ed. Robert B.  
Partlow, Jr. (Carbondale: Southern Illinois Univ. Press, 1970), p. 182. 一方,  
Stanley Tick はこの章を, Carton の求愛の章の直後に置かれていることに関連  
して, Cruncher の “Resurrection-Man” としてのパロディの点から論じている。  
“Cruncher on Resurrection: A Tale of Charles Dickens,” *Renascence* 33  
(1981), pp. 86-98. A. D. Hutter も “‘The Honest Tradesman’ (II, XIV) com-  
bines national, commercial, and generational conflict’ としてこの章の構造を作  
品全体の構造の反映として重要視している。 “Nation and Generation,” pp.  
454-55.
- (6) Jerry が墓を暴く行為を自ら ‘fising’ と呼び, 後に Lorry 氏の前では「土を耕  
す類の仕事」(‘Agricultooral character’ (p. 291)) と名付けていることは, 最後に  
断頭台に向う荷車の列がフランス民衆の間に「耕された畔」(‘the furrow plough-  
ed’ (p. 355)) を作ったと同時に, この民衆は繰り返す, 氾濫する海として描かれ  
てきた事の不気味なパロディとなっている。もちろん「農耕」には第一巻一章の  
「死神という農夫」(‘the Farmer Death’ (p. 2)) のイメージが貫かれている。さ  
らにこの関連で言えば同章の「運命というきこり」(‘the Woodman, Fate’) と道  
路人夫が革命時に姿を変える「木挽き」(‘sawyer’) との類推も生まれる。
- (7) チャールズ・ディケンズ著, 中野好夫訳『二都物語』(上), 新潮文庫, 1967年,  
p. 219.
- (8) この場の Dr. Manette の「石化」と侯爵の「石化」との類推については,  
Lawrence Frank, “Dickens’ *TTC*: The Poetics of Impass,” *American Imago*  
vol. 36 (3) (1979), p. 239.